

佳作 帰郷

中村 浩史

名古屋駅から名鉄バスに乗ると津島まで約一時間。名古屋鉄道の津島行き急行に乗れば二十分ちよつとで着くのだが、私はあえて時間もお金もかかるバスを選んだ。

バスからの風景を楽しみたかった……というのは言い訳にすぎない。確かに、バスのルートは県道を走るので久しぶりの帰郷を実感できるのだろうが、それよりも胸の奥底から込み上げてくる不安の方が大きく、笠松から乗った電車も名古屋で降りてしまった。

今から約五年前、私は自分の夫を殺した。

津島で生まれた私だが、物心ついた時にはすでに父親は他界していなかった。女手ひとつで一生懸命育ててくれた母。貧しいけれど、穏やかな暮らしがずっと続くと思っていたが、そんな母も私が二十歳のときに病気で亡くなってしまうた。

大学を出た私は、東京の小さな建設会社に就職した。

地元津島には疎遠な親戚がいるだけだった。天涯孤独となつた身で地元にとどまる意味が私にはなく、地元を離れて東京に

出るのは当然のことだと思っていた。

社内恋愛の末、結婚したのが入社して二年。すぐに子供もでき、私はこれからバラ色とはいかないまでも、人並みに幸せな人生が待っていると信じていた。

なぜこんなことになってしまったのだろう。どこで、間違えてしまったのだろう。

五年間檻の中で何度も自問自答を繰り返したが、未だに答えは見つからない。

正午に近い時間ということもあつてか、バスの乗客は私をふくめて三人だけだった。

後ろから二番目の席の窓際に座る。空はどんよりと曇っている。

実刑六年だったが、模範囚の私は五年で檻から出ることができた。

今、私は三十六歳。十分にやり直しがきく歳なのではあるのだろうか、私にとって檻の中で過ごした五年で、何もかも変わつ

てしまったような気がした。

正確には変わったというより、止まったというべきなのだろう。本当は地元などに戻りたくはなかった。しかし、戻らなければ、私はこれから一歩も先に進めない。それだけは揺るぎない事実だった。

バスはあつという間に大正橋の袂までたどり着いた。橋を渡れば名古屋市外に出る。

ふと、大学を出て以来の帰郷だということに気づいた。実に十二年ぶりの帰郷なのに、なんの郷愁もわいてこない。もしかしら、名古屋駅前には新しいビルがいくつも建ち並び、私の記憶とすいぶん違っていたからかもしれない。

バスは庄内川を越えると右折。新川も越えると佐屋街道に入る。

昔ながらの家が立ち並び、私は少しだけ懐かしさを感じることができたが、それもつかの間の感情。すぐに霧散し消え去った。私が服役している間に、誰も住んでいない実家は娘の世話してくれている親戚の手によつて売りに出された。だから帰郷と言つても私には帰る家などない。両親の墓があるだけだが、東京に出て以来、一度も参つたことはなかった。

バスは順調に進んでいく。途中で乗り込んでくる人も、下車する人もいない。

夫が私に暴力を振るいだしたのは、娘の遙が産まれて一年ぐ

らい経つてからだったと記憶している。

理由はいつともとても些細なことだった。部屋の隅に埃がたまつている。洗濯物のたたみ方が気に入らない。料理の味が濃いなど。しかし、それもやがてなくなり、なんの理由もなく、私への暴行は日常の一ページになった。まるで毎日の日課のように。

私は五年間耐え続けた。全ては娘のためだった。青あざが消える日はなく、時には骨折するまで殴られることもあつたが、病院には行けないので痛みを耐えるしかなかった。

娘が殴られるくらいなら、私が殴られていればいい。そう思うことによつて、私の自我は何とか保たれていた。

どんなに暑い日でも長袖を着用し、サングラスをかけて娘を送迎する私を、近所の人はどう思っていたのだろうか。

高級マンションに住んでいても、ブランドものの服を着て、お金をたくさん持っていても、私には何の意味もなかった。

夫は弱い人だったんだと思う。結婚、出産、仕事で大きなプロジェクトを任せられたこと……それらの重圧に耐えられなかった夫のはげ口は、妻である私しかなかったのだ。

バスは佐屋街道を進んでいく。窓の向こうには見たことはあるがどこか違う風景が続く。

暖房が効いたバスは心地よく、睡魔に襲われる。当たり前のことだが、収監中は昼寝などできない。私は欲望

の赴くまま、目を閉じた。バスのエンジン音が子守歌になり、

すぐに眠りに落ちてしまった。

それは何度も見た夢だった。

狂ったように泣く娘。足元には夫が倒れ込んでいる。ゆっくと血が床に広がっていく。

私の手には血で染まった包丁が握られている。いや、包丁だけではない。私自身も血だらけだった。

「もう終わったから……ようやく終わったから。終わらせたから。安心していいのよ、遙」

娘の遙は泣き止まないどころか、さらに大きな声をあげた。

私は携帯電話を取り出し警察に電話をする。

なぜ、なぜ、なぜ、どうして……どうして遙は笑ってくれないの？ もう何も心配しなくてよくなったのに。

「……！」

大きく息を吸い込みながら、微睡から目覚めた。もしかしたら、少し叫んでしまったかもしれない。周りも見渡してみたら、いつの間にか乗客は私しかいなくなっていた。

額に滲んだ油汗をぬぐう。バスは日光川に差し掛かっていた。ほんの数十分眠っていただけだった。

檻の中で何度も見た夢。それは何度見ても慣れることはなかった。

あの日、夫は初めて遙に手を上げた。

その瞬間、私の中で何かはげげ飛んだ。キッチンにある包

丁を手に取り、何の躊躇もなく夫を刺した。

その後の記憶はかなり曖昧だった。取り調べ、裁判、そして収監。

まるで現実味がなく進んでいった。あの日以来、遙には会っていない。

日光川を越えたところにある、古川でバスを降りた。津島駅まで乗っていく気にはなれなかった。もし、親戚や知り合いにばったり会ったりでもしたら……そう考えるだけで背筋に冷や汗が流れる。

十年も会っていない私のことなど、誰もわかりはしないのでは？ 髪も短くなり、監獄生活ですっかりやせ細った私。昔の面影などかけらもないと、自分では思っている。

遙は私だと気づいてくれるだろうか。そもそも私のことを憶えているのだろうか。

刑務所の中で何通も何通も遙に手紙を出したが、一度も返事はきていない。

遙を引き取った親戚は唯一の親族であり、私の身元引受人でもあるが、刑務所に来た手紙には「二度と私たちに手紙を出さないで欲しい。出所したら永遠に姿を消して欲しい。遙のことは責任を持って育てる」といった内容のことが記されていた。

私は親戚の言う事は無視して、遙に手紙を出し続けた。

バスを降りた私は、ヨシツヤに向かって歩いた。

地元のスーパーヨシヅヤは、用もないのに何度も行った場所だ。店内に入ると、懐かしい音楽が聞こえてきた。その時はじめて、地元に戻ってきたんだという実感がわいた。

ふらふらとした足取りでフードコートに行き、スガキヤでラーメンを頼んだ。

出来上がってきたラーメンを一心不乱にすすった。娑婆に出てきて初めての食事がスガキヤだなんて、笑ってしまう。

(美味しい……)

味覚と嗅覚は記憶に強く結びついているという記事を何かで読んだことを思い出した。

しかし、どんなに懐かしい味を楽しんでも、あの日に止まってしまった時間が動き出すことはなかった。目に映る風景もまるでモノクロ映画を見ているようで、現実感がない。

夫のDVに耐えた五年。その後服役した五年。私の十年という時間はなんだったのだろう。

痣だらけの体では、パートに行く事も出来ず、毎日家の中に引きこもる生活。社会と隔絶された私の感覚はどんどん狂っていき、時間の流れもよくわからなくなってしまった。

夫がいなくなれば、全てが変わると思っていた。しかし、何も変わらなかった。変わらないどころか、私の支えであった遙もいなくなってしまった。

後悔するのは娘と引き離されたことだけだ。夫を殺したこと

に何の後悔も罪の意識すらもない。

食事を終えた私はヨシヅヤを出て歩き出した。四時の待ち合わせにはまだ二時間近くあるが、ヨシヅヤでは知り合いに会う可能性が高すぎる。

遙は来てくれるだろうか……。そのことを考えるだけで、鼓動が急激に早くなる。

二月は昼間でもまだまだ寒く、私はヨシヅヤで買った安いフリースのジャケットを羽織った。

最後に出した手紙には「出所が決まったこと。今日の四時に東公園で待っていること」を書いた。

何もかもなかったことにして、やり直せるなんて思っていない。

目の前で遙の父である夫を殺してしまった私に、もはや母を名乗る資格などないのかもしれない。

昼間の田舎道は車はそこそこ走っているが、誰も歩いてはいない。ダラダラと歩き続けていると、やがて市民の森にたどり着いた。

何の意思もなく、吸い込まれるように森の中へと入って行った。まあ、森というより林といったほうが正しい。雑木林の遊歩道と表現するのもっとも正しいような気がした。

目的地である東公園からは近いのだが、私は「市民の森」を訪れたのは初めてだった。

森を抜けると、急に視界が開け、目の前には小さな原っぱが広がる。少しだけ遊具が置かれた原っぱの先には、目的地である東公園が見える。

原っぱに置かれたベンチに腰掛けた。

左手には錬成館。右手には市営球場が見える。風に乗って錬成館からだろう、剣道の掛け声が聞こえてくる。

私はしばらくの間、その声に耳を傾けながら、ぼんやりと空を見上げた。

雲がかかった空は雨こそ降りはないが、眺めていて楽しいものではなかった。

これから私はどこに行き、何をして生きていけばいいのか。何もわからない。何も決められない。

遙に会えても会えなくても、明日からは出所する時にもらった在監証明書を手手に、役所の各部署をまわらなくてはいけない。自分に強くそう言い聞かせる。

ベンチから重い腰を上げ、公園に向かって歩き出した。

公園の時計は三時を指していた。あと一時間。公園の中にある津島児童科学館の前を待ち合わせに指定したが、まだ誰の姿もなかった。

公園には子供を連れだした母親の姿がちらほらと見かけられた。

私には違う世界のことのように映る。遙とこんな風に遊んでみたかった……それは永遠に叶わぬ願いだった。

時計の針が三時半を回った。手がじつとりと汗ばむ。

私は居ても立ってもいられなくなり、公園内のジョギングコースを行ったり来たりと歩き出した。

遙ほどのくらい大きくなったのだろうか。四月からは中学生になるはずだ。女の子が通るたびに遙と思ひ、不審者と間違われるくらい凝視してしまう。

どうしても会いたいと思うと同時に、膝が震えるくらい会うことを恐れていた。

今すぐ逃げ出したかった。でもどうしてもできない私がいた。十五分前。

ついに歩くことでは抑えきれず、ジョギングコースを走り出した。

十分前。五分前。そして、四時。

走ることをやめられなかった。少し遅れているだけだ。自分にそう言い聞かせながら、私はひたすらに走り続けた。

五分後。十五分後。三十分後。一時間後。

公園は茜色に染まっていた。息が上がりに、これ以上走れなくなった私は、科学館前に崩れ落ちるように倒れ込んだ。

来るわけがない。少しでも希望を持っていた自分を激しく責めた。

起き上がり、階段に腰を下ろした。全身が鉛のように重かった。汗が乾き、容赦なく体温を奪っていく。

寒さに震えながらも、動く気にはなれなかった。このまま死んでしまうことが運命にすら感じていた。

陽は沈み、あたりは暗闇に包まれていく。

またひとり、またひとりと、公園で遊んでいた子供たちが家に帰っていく。

そんな中、陽が沈んだ中でも遊んでいる子供が一組いた。小学生高学年くらいだろうか、大きな声で次の遊びを説明していた。「じゃあ、十数える間に、俺がこれを隠すから、お前ら五分で見つけるんだぞ。見つけれなきゃ罰ゲームな」

その瞬間、私は思い出した。私が怠だらけのせいで公園にも連れて行けず、無駄に広い家の中で遊んでいた時のことを。

どうして今まで忘れていたのだろう。何度も何度も遊んだのに。私が十数え、遙がその間に指定したものを隠す。遙が隠したのを見つけたら私の勝ちだ。わざとわからないふりをして大げさに探し回ったりしたが、それがとても楽しかった。

暗闇に目を凝らし、私は科学館の周りを注意深く見渡した。すると、科学館の郵便受けが取り付けられた壁との間に、何か紙が挟んであるのを発見した。

それはほんの少しだけ隙間からはみ出ており、よほどのことがなければ気づかないと思われた。

私は確信をもって、その紙を引き抜いた。それは手紙だった。

表には「お母さんへ」。裏には「遙」と書かれていた。

鉛のような体がすつと軽くなるのを感じた。それとは反対に頭は真つ白になり、何も考えられなくなった。

気が付けば、声を上げて泣いていた。

この手紙の中には、私をさらにどん底に突き落とすような内容が書かれているかもしれない。

しかし、今の私にはそんなことはどうでもよかった。五年間、送り続けた思いが、今返ってきたのだ。そのことがただ嬉しかった。

止まっていた時間が動き出すのを感じた。

夜の暗闇の中でも、極彩色に彩られた風景が目の前に広がる。ありがとう。

手紙を握りしめながら、何度も何度もつぶやいた。

〈了〉